

地域研究コンソーシアム 2006 年度年次集会企画シンポジウム 「研究史としての日本の地域研究——戦前,戦後,そして未来へ——」

せ がわ まさ ひさ
瀬 川 昌 久

- はじめに
- I シンポジウムの趣旨
 - II ひとつの地域研究論 (毛里和子氏)
 - III 日本における中東研究とイスラーム地域研究 (赤堀雅幸氏)
 - IV 地域研究と「モンゴル」史 (岡洋樹氏)
 - V コメント (大塚和夫氏, 関本照夫氏)
- おわりに

はじめに

2006年11月25日(土)に、東京都港区芝浦のキャンパスイノベーションセンター国際会議場を会場として、地域研究コンソーシアム2006年度年次集会企画シンポジウム「研究史としての日本の地域研究——戦前,戦後,そして未来へ——」が開催された。

地域研究コンソーシアム(JCAS)は、地域研究を推進する研究組織、次世代の地域研究者を育成する教育組織、そして地域研究の成果を実社会で活用する民間組織など、「地域研究」を共通のベースとする国内のさまざまな組織や個人が結集して作られた組織体である。2004年4月の結成以来、同コンソーシアムはアカデミク・コミュニティーに立脚する新しい型の組織連携として、地域研究に関わる組織や個人が既

存の枠組みを超えて出会う場を提供し、また、異分野・異業種間の出会いを促進することで、社会に根ざした学問としての地域研究の発展を目指している。現在、その加盟組織は73を数えるが(2006年12月現在)、コンソーシアムの組織としては、幹事組織の長と加盟組織の代表で構成される理事会のもと、京都大学地域研究統合情報センターに事務局を置き、北海道大学スラブ研究センター、東北大学東北アジア研究センター、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、上智大学アジア文化研究所・21世紀COEプログラム、京都大学東南アジア研究所、京都大学地域研究統合情報センター、大阪外国語大学大学院言語社会研究科の7組織を幹事組織として活動を行っている。

地域研究コンソーシアムの具体的活動としては、ホームページ(<http://www.jcas.jp>)やメールマガジン、和文雑誌、ニューズレターを通じた参加組織間の地域研究情報の交換ならびに外部への発信、「大学院・次世代育成」、「情報資源共有化」、「地域情報学」、「社会連携」等の研究部会によるワークショップやシンポジウム、研修などの実施、そして年に1度の年次集会での活動報告、企画シンポジウム、懇親活動などである。本稿で紹介するシンポジウムは、同コ

ンソーシアムの第3回の年次集会の一部として企画されたものであり、会長（家田修・北海道大学スラブ研究センター教授）の挨拶、運営委員長（西井涼子・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授）等による一連の年間活動報告に引き続き、同日15:00より約100名の参加者を集めて行われた。報告者等は以下の通りである。

報告者：

毛里和子氏（早稲田大学：中国研究：政治学・国際関係論）

赤堀雅幸氏（上智大学：中東・イスラーム圏研究：文化人類学）

岡洋樹氏（東北大学：モンゴル研究：歴史学）
コメンテーター：

大塚和夫氏（東京外国語大学：イスラーム圏民族誌：社会人類学）

関本照夫氏（東京大学：東南アジア研究：文化人類学）

司会：

瀬川昌久（東北大学）

以下では、同シンポジウムの企画の趣旨、ならびに各発表者の発表内容を中心に紹介を行いたい。

I シンポジウムの趣旨

同シンポジウムは、幹事組織の中の年次集会担当である東北大学東北アジア研究センターが中心となって企画したものであり、シンポジウムの開始にあたって司会を務める同センターの瀬川昌久教授より以下のような趣旨説明がなさ

れた。

地域研究コンソーシアムに参加している組織・団体等は何らかの形で「地域研究」に関わっているが、個人研究者の立場で考えてみると、自分自身をどの程度まで「地域研究者」としてアイデンティファイするかについては、人により、またディシプリンの違いによりだいぶ濃淡の差が存在する。人によっては、自分は特定地域を直接的研究の対象としてはいるが、方法論的には特定地域に縛られるものではなく、したがって「どこそこの国についての研究者、どこそこ地域の研究者」と自らがみなされることに違和感をもつ場合も少なくないと考えられる。これは、「地域研究」という研究領域が未だ一般的なものとして確立していなかった時代に、既存のさまざまなディシプリンの立場から具体地域の研究に取り組んできた、少なくとも我々旧世代の研究者には、程度の差こそあれ普遍的に存在する傾向であろう。

近年「地域研究」を名称に冠した研究科が設置されたり、科学研究費補助金の複合新領域として「地域研究」という分野が設けられるなど、「地域研究」という研究領域は日本においても漸く広く認知されたものになりつつある。それにつれて、おそらくは次世代においては、最初から「地域研究」という領域のなかで育ち、それに100パーセントのアイデンティティをもつ研究者も登場してくるであろう。しかしながら、現状では「地域研究」という言葉で総称される研究の対象も手法も実に多様であり、地域研究コンソーシアムに加盟している全国の地域研究関連の諸組織の間でも、あるいは同一機関に所属する同僚の間においてさえ、その認識は様々であるのが実情といわざるをえない。

この多様性は、地域研究が既存の諸ディシプリンの複合の上に立脚し、また特定の地理的範囲についての可能な範囲でのホリスティックな理解を目指している以上、当然の性格といえるものであり、そうした多様性・雑多性こそが新たな発想を生む基盤になるというポジティブな考え方もある。しかし、研究者ごとに「地域研究」のセルフ・イメージが拡散したままでは、ひとつの研究領域として存続してゆくためには課題が残る。また、そのこと以上に、せっかくこれだけ多様な分野の専門家が「地域研究」という名のもとに糾合される機会をもつことから、互いがある「地域研究」についてのイメージや問題意識、今後の展望などを互いにすりあわせること自体が、新たな発見や着想を生む好機を提供するであろう。少なくとも、個別の地域、専門を超えて「地域研究」というもののできるだけ対象的・自覚的に捉え直し、自分の研究とそれとの重なり具合や距離感についての認識を確立しておくことは、このようなコンソーシアムの場合を通じて他の「地域研究者」との交流を深めてゆく上で、非常に重要な起点となることは間違いない。

そのように、「地域研究」の輪郭や性格を再確認する作業において、特に重要と思われるのは、日本国内においてこれまで行われてきた「地域研究」あるいはその「先行形態」のもつ傾向性や特色というものを整理しておくことである。確かに「地域研究」は、一見あらゆる手法と多様な関心を包含する雑多な複合体であるようにもみえるが、国際的により広い視野から捉え返した場合、現在この日本において行われている「地域研究」にはそれなりの特色ないし傾向が存するようにも思われる。少なくとも、日本に

おいて行われている地域研究は、欧米で行われているそれと全く同じではない。それは戦前から存在した先駆形態となる諸研究領域の蓄積と、戦後日本の知識人・学術界が身を置いてきた社会的・知的コンテクストとも深く結びついて形成されてきた。そのように「研究史」として日本の地域研究を再把握する試みは、「地域研究」という一見雑多でとらえどころのない領域を客観的・対象的に捉え直し、自分自身の今現在の研究を定位してゆくために不可欠である。そしてこうした作業こそは、地域研究コンソーシアムのもとに集まった諸研究組織や個々の研究者が、「地域研究」についてのセルフ・イメージを共有してゆくための、重要な1ステップであるとも考えられる。

本シンポジウムでは、このような問題意識に立脚し、基盤とするディシプリンも、おもな研究対象地域もそれぞれに異なる3名の先生方において、御自身の関わっておられる「地域研究」をできるだけ客観的に捉え直し、その特色、問題点、更には今後の展望などをお話しいただこうと考えた。ディシプリンとしては毛里先生が国際政治学、赤堀先生が文化人類学、岡先生が歴史学であり、また対象地域としては毛里先生が中国、赤堀先生が中東、岡先生がモンゴルと多様であるが、それぞれの立場からのお話を伺い、その上でお2人のコメンテーターの先生方からコメントを頂戴することとしたい。

以上の趣旨説明に引き続き、報告者・コメンテーターの紹介の後、下記のような内容の報告が行われた。

II ひとつの地域研究論 (毛里和子氏)

「地域研究」をめぐることは、これまでもさまざまな議論がなされてきた。例えば「地域」とはいったい何なのか。また、地域研究はそれ自体がひとつのディシプリンか、それとも複数のディシプリンが出会う場か。あるいは、アメリカで行われている地域研究と日本のそれを比較した場合、戦略性その他について連続性が認められるのか、断絶性の方が大きいのか。さらには、他者研究としての地域研究と自者研究としての地域研究、あるいは共同研究としての地域研究はどのように性格を異にするのか。Global Studies と Area Studies はどのような関係にあるのか。などなどである。そしてこれらの議論を通じてあらためていえることは、地域研究において理論、国境、言語というものがもつ侮りがたい重要性である。

「地域」概念に関するこれまでの議論のなかでしばしば指摘されてきたことは、「地域」はそれを認識する者の視点により作られ、あるいは伸縮するということである。すなわち、一口に「地域」といっても国家内の一地方のような小さな範囲から、国家そのもの、さらには複数国家、文明圏、生態圏といった広範囲のものまで、さまざまなレベルに設定されうる。「地域」の定義に関わる代表的な考察として、高谷好一氏、原洋之介氏、山影進氏のものが挙げられる。また、「地域研究」の方法論としては、個別地域、個別テーマの研究の総合から全体的地域像を明らかにし、さらに知の再構成を促すものとして地域研究を論じた立本成文氏の論考が参考になる。

これまでの地域研究の代表的資産としては、Clifford Geertz の研究と、日本の原洋之介氏の研究を掲げることができる。Geertz は、「研究・探求の手順をラディカルに客観化すれば真理が見つけられる」といった信念は、もはや成立しえない。探求者の側が科学にもち込むものと、探求される側が科学にもち込むものとを分離することなど、とてもできない」と論じている。また原氏は、「経済理論とアジア経済の現実が異なっていればそれは現実がまちがっているのだから経済学の理論に従って現実を改造せよ、というのでは無理がある」と論じ、「アジア経済研究は独自のディシプリンとして成立しうるのではないか」と主張している。

地域研究が知的貢献としてなしうることを挙げるとすれば、以下のようなになるだろう。第1に、ひとつひとつのディシプリンの限界性の認識から、学際性への強い要請と既存社会科学への疑義を導くこと。また第2に、国民国家が世界と個人の間中に存在するものとして「最適な単位」かを問い直し、政治的地域、経済的地域、文化的地域といったより機能的な地域区分を提起することによって、「国家」の排他性、限界性への挑戦を行うこと。そして第3に、地域の特性への強いこだわりと、自己との相違の認識による対象化を同時に可能にすること。

そこで、自分が関与している21世紀COE「現代アジア学の創生」の例を紹介したい。同COEプロジェクトでは、アジアはあるのか、どこまでがアジアか、アジアはひとつの地域か、という問いに対し、「地域は作られる」という立場から、(1)フィクションとしてのアジア、(2)アイデンティティとしてのアジア、(3)政治的・国家的シンボルとしてのアジア、(4)空間的場

としてのアジア——人・モノ・財・情報, (5) 機能的アジア——作られるアジア①, (6) 制度としてのアジア——作られるアジア②, という6つのアプローチを展開している。

最後に、地域研究としての現代アジア学について考える。21世紀に入って、われわれはグローバリゼーションのなかで内発的要請と欲求からアジアがトータルな地域として生成されつつあることを確認し、「ひとつのアジア」を解明する学問を開発、確立すべきである。そのアジアに対しては、研究をする側と研究される側がはっきり区別される「他者研究」ではなく、アジアのなかからの「自者研究」のスタンスでの研究が求められる。「現代アジア学」が成り立つ所以は、現段階までアジアが歴史と伝統を共有してきただけでなく、その目標と方向の共通性にある。近代において、アジアはそれぞれに欧米に直面もしくは支配され、それに対応もしくは対抗してきた歴史を共有してきた。また戦後のアジアは、欧米へのキャッチアップ、後進性からの一日も早い脱却など、その目標を共有してきた。さらに21世紀に入ってグローバリゼーションの荒波を受け、ナショナリズムとリジョナリズムで対応する方向を共有している。

では、アジアがその「アジア性」として共有するものは何であろうか。それは(1)欧米との対比でアジア社会が共有すると仮説できる「公領域と私領域の相互浸透」や政府および政府党体制と企業・経済の関係(つまり政経不可分性)、(2)欧米社会関係の“契約”に対比できる「関係性」ネットワーク、(3)アジアのひとびとが共有すると仮説できる政治文化や権力観、つまり集団主義と温情/依存、パトロン/クライアント関係、以上である。

このように、毛里和子氏は地域研究が既存の社会科学のなかでもっている可能性について、自らの主催する「現代アジア学」を例として提起された。

Ⅲ 日本における中東研究とイスラーム 地域研究 (赤堀雅幸氏)

日本における中東・イスラーム研究に関しては3つの学会がその中心となってきた。ひとつは、1954年に設立された日本オリエント学会(The Society for Near Eastern Studies)であり、もうひとつは63年設立の日本イスラーム協会(Association for Islamic Studies in Japan)、そしてもうひとつのものは日本中東学会(Japan Association for Middle East Studies)で、85年に創立された。

そもそも「中東」という地域概念が確立したのはそれほど古いことではない。西洋がオリエントすなわち東洋を植民地化し再発見してゆく過程で、近東(Near East)、中東(Middle East)、極東(Far East)という区分が用いられるようになった。その後、中近東(Middle and Near East)という用語や、中東(Middle East/al-Sharq al-Awsat)という用語が混用されて今日に至っている。具体的には、西アジア、北アフリカ、地中海世界、オリエント、マシュリク、マグリブ、イフリキヤ等々を包括する地域の総称である。

日本における中東研究の展開としては、まずもって戦前の「回教圏研究」に遡ることができる。回教圏研究所の『回教圏』、大日本回教協会の『回教世界』、外務省調査局の『回教事情』、東亜経済調査局の『新亜細亜』、そして西北研

究所の調査活動などを挙げることができる（平成17-18年度科学研究費補助金基盤研究（A）「日本・イスラーム関係のデータベース構築——戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開」参照）。こうした初期のイスラーム圏研究の特色は、歴史学（次いで思想研究）の優越であり、前嶋信次や井筒俊彦の研究をその例とする。

日本でのその後の中東研究の展開をたどれば、京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査、京都大学大サハラ学術探検、東京大学南西ヒンドゥークシュ調査など、戦後しばらくして探検の時代が訪れた。その後は、アジア経済研究所、東京都立大学社会人類学研究室などを中心とした中東の専門家の養成と長期現地調査の時代へと展開する。今日の問題へのアプローチとしては、イスラーム主義、グローバル化、市民社会、公共権、「オリエンタリズム」、実験的民族誌などが主要なトピックとなっている。

近年の日本での「イスラーム地域研究」の展開についてみれば、まず大型助成研究による組織化とその成果として、昭和63～平成2年度科学研究費補助金重点領域研究「比較的手法によるイスラームの都市性の総合的研究（総括班）」や平成9～13年度科学研究費補助金学術創成研究「現代イスラーム世界の動態的研究」、それに平成18～22年度NIHUプログラム・イスラーム地域研究などを挙げることができる。また、「イスラーム地域」の理論化に関わる研究も行われるようになり、「イスラーム地域研究叢書」などが発刊されている。自分自身が推進しているスーフイズム、聖者信仰、タリーカをめぐる研究会なども、新たなイスラーム地域研究の一例として掲げることが可能であろう。

地域研究の今後の形を考察すれば、公共的知識人としての地域研究者の役割というものを挙げうるであろう。すなわち、「魅力ある大学院教育」を通じて現代世界に貢献する地域研究を目指し、グローバルな市民社会とローカルの多様性を支える次世代地域研究者の育成を行ってゆくことである。また、地域研究のあり方としては以下の2つのものが区別できるであろう。

ひとつは、特定のイシューを中核に、方法論的には必要に応じて多様な取組みを行う個人の実験的研究者による地域研究であり、他方は、実質性をもった学際的共同研究としての地域研究である。

地域研究の今後の方向性としては、地域的固有性の追求からグローバル・スタディーズの一環としての地域性の追求へと向かうことが考えられる。その一例としては、上智大学の21世紀COEプログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」を挙げることができる。上智大学では、外国語学研究科地域研究専攻を改組し、大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻を設ける計画が進んでいる。

以上のように、赤堀氏には日本における中東・イスラーム研究の歴史を跡づけるとともに、現在の研究動向や御自身が取り組まれているテーマ等についても御紹介いただき、さらには今後の地域研究が取りうる形というものについても提起していただいた。

IV 地域研究と「モンゴル」史(岡洋樹氏)

モンゴル史の立場から地域研究というものを考える。モンゴルを含む内陸アジアに関しては、西洋人の認識を示すものとしてDenis Sinorに

よる次のような言及がある。「中央ユーラシアによって空間的に与えられる定義はネガティブなものである。それは大定着文明の彼方に横たわるユーラシアの大陸の部分である。この定義は、その境界が不安定であることを意味している。……（中略）……要するにそれは人の心に存在する文化障壁である。それはもてる者ともたざる者、ペリシテ人から選ばれた民を隔てる隙間に似ていなくはない」、「内陸アジアは『我等が』文明世界のアンチテーゼである。それは野蛮人（the Barbarian）の世界である」。

他方、日本においても内陸アジアや北アジアに対する認識は歴史的に独特な形で形成されてきた。「東洋史」が創出される過程では、那珂通世は歴史を「国史」「東洋史」「西洋史」に区分したが、「東洋歴史ハ支那ヲ中心トシテ東洋諸国ノ治乱興亡ノ大勢ヲ説クモノニシテ西洋歴史ト相對シテ世界歴史ノ一半ヲナスモノナリ」とされ、東京帝国大学文学部東洋史の初期から蒙古史などが講じられていた。

その後登場するのが白鳥庫吉のユーラシア史における「南北対抗」論である。それは北方民族（遊牧民）＝「唯物的」・武力／南方民族（定着農耕文明）＝「唯心的」・文化と南北を峻別した上で、両者の対抗がアジアの衰退をもたらすというものであった。

日本のアジア史認識においては、中国をはじめとする農耕文化と北アジアの遊牧文化の対比的理解と、両者の対抗関係による歴史展開のダイナミズムを想定するものが大勢を占めてきた。そのなかで北アジア研究に関わる学会・研究会としては、内陸アジア史学会、日本モンゴル学会、満族史研究会、日本アルタイ学会（野尻湖クリルタイ）、内陸アジア・イスラム研究者集

会（白馬合宿）、突厥碑文研究会、中央アジア学フォーラム、遼金西夏史研究会、早稲田大学モンゴル研究所等を列挙することができる。

歴史的な北アジア研究には、常に史料の問題がつきまとう。遊牧民研究における現地史料の希少性ゆえに、隣接する文明が残した史料（漢文など）に依拠せざるをえない。他方、非漢文史料としてはチュルク・ウイグル碑文、文書、モンゴル文史料（碑文・『元朝秘史』など）、ペルシャ・トルコ諸語の文献、満洲文・モンゴル文档案など多様な言語・文字によるものがある。

自分自身の専門とする清代・近現代モンゴル史研究についていえば、例えば満洲文史料による清初史研究が可能であり、そこからは「満族政権」としての清朝の国家論的性格の研究が導かれる。また、モンゴル国内における研究も蓄積されつつあり、1976年以降のモンゴル留学経験をもつ新世代の研究者たちは、モンゴルの研究史を踏まえた研究を行っている。それは清代・近現代を中心に、モンゴル文・満文档案史料を用いた研究が主である。それらは特に近現代史に関しては、モンゴルの立場を強く意識した研究となる場合が多い。この他に、日本の植民地統治下の内モンゴルに関する研究も盛んである。

ところで、モンゴル史における地域設定の問題は複雑である。モンゴル国における国家史としてのモンゴル史も、1921年以降はモンゴル国領土を中心とした記述だが、21年以前はモンゴル全体を視野に入れつつ、叙述内容はモンゴル国領域に偏るといったもの。他方、内モンゴルにおけるモンゴル民族史（蒙古族史）の場合には、モンゴル民族を主体とした歴史を描くが、1921年以後のモンゴル国史は除外する。

こうしたモンゴル民族史が包摂する視野の問題点として、内モンゴルにおける「民族史」の場合には、「内モンゴル自治区史」との差違を強調し、多数派住民たる漢族の歴史を除外している点に限界がある。他方、モンゴル「民族史」が内包する問題点としては、「モンゴルらしさ」(mongolness)を叙述しようとし、遊牧民としてのモンゴルのみを強調する反面、「漢族らしさ」(chineseness)の歴史が軽視されてしまう。農耕民としてのモンゴルという視点が課題である。すなわち、モンゴル史やモンゴル文化における中国文化の影響の研究が必要であり、そうした研究は萩原守氏の清代モンゴルにおける中国の法制度の影響の研究など、既に出始めている。今後は清朝統治下の文化的影響をモンゴル史の立場から正当に位置づけることが求められる。

以上で述べたように、地域を枠組みとした歴史認識には多様性が存在する。辺境研究としての北アジア史は、日本における北アジア認識の特質のひとつともなっているが、それには依拠する史料の性格も深く影響している。また、地域枠組みを考える上で、現地での研究というものもつ意味を理解することは重要である。そこには、国家史・民族史の政治的文脈が作用しやすい。例えば東北大学東北アジア研究センターが扱っているモンゴルの砂漠化や黄砂発生等の「環境問題」も、地域政治上の文脈に置き換えられると単なる環境問題にはとどまらず、「民族問題」としての性格を帯びる場合もある。

上記のように、岡氏は専門であるモンゴル史の立場から、日本でモンゴル史を含む北アジア史という研究領域がどのように形成されてきた

かをたどり、その特質を論じるとともに、現地での地域研究の展開が包含する政治的文脈について留意を促す見解を述べられた。

V コメント (大塚和夫氏、関本照夫氏)

まず大塚和夫氏からは次のようなコメントがあった。

地域研究というものの性格に関する毛里先生の報告は大変参考になったが、「アジア」の具体的範囲規定、あるいは「パトロン／クライアント関係」をアジアの共通性と認識しうるかについては疑問が残った。中東研究に関する赤堀先生のご報告も大変わかりやすかったが、日本の研究史としては大川周明なども付け加えられるだろう。イスラーム地域概念に関しては、「イスラーム世界」を歴史の次元ではフィクションとして捉えようとする羽田正氏の立場や、「イスラーム世界」という言葉を積極的に使おうとする小杉泰氏の見解などもあり、これらと絡めて論じることも必要ではないか。岡先生の報告では、モンゴル史が前近代と独立以降では異なる枠組みで語られることに言及されたが、歴史学者の側からそれらを総合して新たな地域概念を提起するというようなことは可能なのだろうか。

次に、「地域研究」というものについて私見を述べるとすれば、私の専門とする文化人類学のディシプリンが地域研究そのものではないことは自明のことである。研究対象としていずれかの地域に関わっていることは疑いない。ただし、「地域」といったときに含意するものも分野により異なり、エリア・スタディーズという

「地域」とは異なる意味で使われることもしばしばあることには注意すべきだ。

また、「地域研究」が日本のアカデミズムで公認されるようになったのは比較的最近だが、日本学術会議でも一昨年から「地域研究」は専門委員会のひとつを占めるに至り、確実に制度化されつつある。地域研究がそれ自体ひとつのディシプリンたりうるかについては以前から議論のあるところだが、「地域研究」一般というものがパラダイムとして成り立っているとは未だいえないと考える。しかし、社会制度としては確実に確立されつつある。それと並行してパラダイムとしての地域研究を確立していけるかどうかは、このコンソーシアムの若い世代を中心として、今後にかかっている。

次に、関本照夫氏から次のような内容のコメントがあった。

毛里先生のお話は非常に共感できるものであった。我々は人類または人間というものを研究対象としているが、実際に実地調査の対象としたり文書資料のなかで分析対象とするのは小規模な対面的コミュニティーの範囲に限られる。しかし、人類全体と小コミュニティーの両極のみがあるわけではなく、それらの間を結んでいる多様な関係や文脈というものが存在し、そうした文脈こそが「地域」というものだと考えられる。その意味で毛里先生のいわれた「関係」、岡先生のいわれた「文脈」という考え方には同意するところ大であった。このような見方に立てば、「地域」の固定化あるいは物神化に対しては自戒が必要であろう。

また、人類の研究に関しては、まず人類とは

自己の利益に従うものだとか、ゲームのプレーヤーだとか、規定することから始めて、その具体的例証のために対面的コミュニティーレベルに降りてくる研究もあるだろうが、それではディシプリンの自己目的化に陥りやすい。こうした自己目的的研究と対話することは容易ではないが、地域研究というものを成立させていくためには、いかにしてそうした異ディシプリン間の対話を可能にしていくのが重要なポイントであろう。

それから、国史研究（national historyの研究）と地域研究の関係に関する岡先生の考察にも非常に感銘を受けた。歴史とはさまざまに絡み合う関係やプロセスをある文脈において位置づけるものであるとすれば、「地域」も文脈であると考え自分の立場と重なり合うところが大きいと感じる。他方、国史研究やそれを支える住民の意識も軽視はできない。ここでもやはり対話が重要になってくる。

一般に受け入れられた「大地域区分」というものは存在するが、「地域」の定義は可変的である。日本の地域研究は、そうした世界史上の大地域としては取り上げられないような地域の研究から出発してきたことを再確認するべきであろう。安定的な制度化に向かうだけでなく、そうしたものを疑い、「文脈」を変える見方を提供することこそ、地域研究の使命なのではなかろうか。

おわりに

以上は、本稿報告者（瀬川）が聴いて理解しえた範囲での本シンポジウムの内容である。文脈の読み違いや発言者の意図の取り違いがある

ならばその点はひとえに本稿報告者の不明に起因するところであり、御容赦願いたい。

大塚和夫氏のコメントのなかにもあったとおり、「地域研究」は日本の学术界において認知度が急速に高まりつつある反面、そのパラダイム形成は未だ途上であり、そこに関与する既存諸ディシプリンとの関係についても認識は多様なままである。本シンポジウムのなかでも、地域研究を諸ディシプリンの対話を生み出すための「アリーナ」として考える考え方が基調をなしていたが、シンポジウムの最後にフロアの若手研究者からの意見として、地域研究をもっとポジティブに定義し、ひとつのディシプリンとして確立していくべきだという意見があったことを付記する。

地域研究コンソーシアムは、地域研究の根本的な自己規定、あるいはセルフ・イメージの確立を目指して、このような議論を続けている途

上である。それをあまりに遅々とした、あるいは遅きに失した議論と考える人々もいるであろうが、昨今の学会会議の再編とも連動して、こうした議論が日本における「知」の再編過程の一翼を担うものであることもまた事実である。本シンポジウムで、部分的ながら日本の地域研究史ならびにその前史をたどりつつ、今後そのありうべき形を考察したことは、それなりの意義があったものと確信する。そして、関本照夫氏が最後にコメントされたように、地域研究がその制度化とは別に、これまでの日本学术界におけるその存在様態、すなわち既存の大枠に収まらず、多様な文脈を掘り起こす縦横無尽な研究領域としての存在様態を、今後も永く保持できることを望むものである。

(東北大学東北アジア研究センター教授)